
聖術師と銀の隊長

山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖術師と銀の隊長

【Zコード】

N1849U

【作者名】

山田

【あらすじ】

聖なる力をこめて歌うことで、魔族の呪いから国を守る役目の聖術師。主人公であるルアも聖術師の一人で、毎日、国の中核にある聖堂で歌を歌つ日々を過ごしていた。だけどある日。戦いの最先端であるラナン塔へ緊急配備されることとなってしまった。そこで、ルアは銀の髪を持つ隊長と出会い、・・・。

私の名前はルア・スター・チス。

今年で22才となり、少女とはもう言えない歳だけど、女と言つには胸と腰、お尻のあたりの凹凸が寂しすぎる体系。いわゆる寸胴といふやつ。

仲間には、細くて羨ましいなんていわれるけれど、ムチムチで色気バツチリの

出るところ出でる完璧ボディな女性に言われると逆に悲しくなる。

腰までの長い黒髪に青い瞳。取り立てて珍しくも無い色合いに顔立ち。

特に自慢できる頭も容姿も持つていなければ、私には唯一自慢できる特技がある。

特技というのは少し違うが、私は聖なる力を持つて生まれた希少な人間らしい。

その力を持つていたおかげで、小さい頃に国に保護され、力を正しく使うための訓練や教育を無料で受ける事が出来た。

まあ、その代わり、強制的に国のために働くことになるのだが、それは嫌ではない。

むしろ職が得られて、万々歳だ。

15才の時に訓練を卒業して、それから7年間、国の中にある聖堂で数人の同じ力を持つ仲間と歌を毎日歌い続けた。

歌を途絶えさせてしまうと、魔族の呪いが人々を蝕み死に至らせ、大地を汚す等、恐ろしいことになってしまふから。

私達、聖なる力を持ち、聖歌を歌うことが出来る者を人々は聖術師

と呼んでいるのだが。

その聖術師がいない地はすべて呪われているのかといふとそうではなく、魔族とよばれる種族が呪いを撒き散らして、私達の住むレウイシア国を乗つ取ろうとしているから、国の中で歌つてゐる私達が歌を途絶えさせると、魔族がこれ幸いと攻撃をしかけてくるということであつて、すべての場所に呪いがかかっているわけではない。魔族は世界を自分達のものにしようとしているらしく、つい先日、レウイシア国に西側にあつたスパラキシス国を滅ぼしてしまつた。そのままの勢いでレウイシア国に攻め込んだようだが、我が国は優秀な騎士団と聖術師が揃つており、易々とは侵略されはしないしさせるつもりもない。

西側の国境近くに立ててゐるラナン塔には第三騎士団と第四騎士団が駐在してゐて

彼らが壁となり、魔族はこれ以上、レウイシア国へ進行することが出来ない状態となつてゐる。

城からは遠いラナン塔の位置あたりから、魔族が呪いをかけてくるのを防ぐ、それが今の私のお仕事。

そう、今までは。

今日も聖歌を歌つため、朝担当の人たちと交代しようとした、私は友達のトレーニアと聖堂に向かつてゐた。

「暁担当なんて早く終わらないかしら。夜の静まつた空氣の中で歌う方が断然良いわ。」

とトレーニアが美しい顔を少し歪めてため息をつく。

「まあ、見学者が一番多いのは暁間だから。」

私が苦笑して言つ。

「人にじろじろ見られて喜ぶのなんて、ラーグスだけよ。」

いつそ、あいつを広場で一人歌わせて、私達は扉を閉めた室内でひつそり歌うつてのはどうかしら。」

その提案、ラーケスは喜んで受けるだろつが、広場と室内では距離が遠く連携が取れないから無理だ。

トレニアとたわいも無い話をしていると、腰に剣をつけ今すぐにでも戦える準備が万全という姿をした背の高い男が3人と聖術師をまとめる役割の大臣が、少し早足でこちらへ歩いてきているのが見えた。

通り過ぎて行くのだろうと思つたら、私達の目的である聖堂の扉の前で彼らは止まる。

そして、大臣が私達のほうへ向かつて呼びかける。

「昼担当の者達は朝担当と交代する前に話があるから、私のところへ集まるように伝達してくれ。」

そう言つと、扉を開けて中へ入つていった。

朝担当の人たちが歌う中、私達昼担当と背の高い3人の男と大臣が聖堂の端に集まつた。

大臣が中央に立ち、その後ろに3人の男が並び、その向かい側に昼担当の人たちがいる。

昼の担当は合計10人、向かい合つている男3人より人数は多いけど、3人がかもし出す怖い雰囲気には

私達は飲まれていた。怖いというのは顔ではなく、戦い慣れしている雰囲気が怖い。

彼らはきっと、いや確實に日々戦いに身をあいているのだろう。城の中央で守られて歌を歌つている私達には刺激が強すぎるのだ。

「この10名を推薦するが、どうかな。」

大臣が振り返り、3人に尋ねる。

真ん中にいた人が代表で話す。

「来てくれるだけで、万々歳ですよ。時間が無いから、すぐに戻りたいのですが、いいですか？」

大臣は頷き、私たちに向き直る。

「君達はラナン塔へ配備されることに決まった。急ではあるが、すぐここを発つもらつ。

3時間後に荷物をまとめて、またこの場所へ戻つてくるように。」大臣は私達に行けという風に、右手を振ると。朝担当の聖術師の元へ向かつた。

私達はしばらく啞然として意味も無く大臣の向かつて行つた方を見ていたが

3人の内の1人が話し始めたので、そちらを向く。

一番右側にいる、一番背が高く、固い顔をしている人だ。

「俺達はラナン塔に配備されている、第三騎士団の者だ。お前達には不運だろうが、まあ、國のためだと思つてあきらめてくれ。」

それから、私達はのろのろと自分の部屋へ戻り、よく頭の整理が出来ないまま

必要だと思うものをカバンに詰め込む。

同部屋のトレニアは彼氏に別れの言葉を言うことが出来ないなあ、と呆然と窓の外を見ながら呟いていた。ラナン塔に配備されると言う事は、数年で戻つてこれるわけがないと言つ事。

こことラナン塔では遠すぎて、会いに戻つてくることも出来ない。恋人ではなく、家族がいる場合、希望者はラナン塔が立つている町へ国が住まいを設けてくれる。

私には恋人がいたため、トレニアの悲しさは分からなかつたが、少しでも心を慰めるため

後ろからせつと抱きついた。トレーナーも抱きしめ返してくれた。

それから3時間後、私達はこの都市から旅立った。

ラナン塔へは馬車で向かったが、その中で騎士達が今回の緊急配備について何があつたのかを教えてくれた。

聖術師という呪いを跳ね除ける存在は、実はラナン塔にも前から10名ほど配備されていたのだ。

戦いの最前線であるため、年を重ねた経験豊かなものが居た筈なのだが、どうやら全員

魔族に殺されてしまつたらしい。

その将来自分の身にも起つうる事実にぞつとしたが、ふと疑問が湧く。

聖術師は戦いに参加することなく、塔の中で守られて歌を歌つていいのではないか。

だとしたら、城の中にまで攻め入られるような戦況で、ラナン塔は危うい状態なのか。

騎士はその事は否定してくれた。ラナン塔は十分、壁の役割を果たしているようだ。

ではなぜ、聖術師が皆、死に至るような事態となつたのかといつと、魔族が戦い方を変えてきたからだそうだ。

聖術師の一人が城壁の向こう側、魔族がいる外側で泣いている子供を見つけたことから始まった。

その子供を見つけた聖術師はあわてて保護に向かい、その子を連れて、仲間の元へ戻つていく

その子供が急に奇声を発して、おぞましい姿、魔族へと変わったのだ。

どうやら、その子供はボールか何かを取りに無断で壁の向こう側へ

おりて、魔族に体をのつとられたらしい。

騎士が異常を感じて、駆けつけ、魔族を倒した時には聖術師は全員殺されていた。

その魔族の奇襲を受けた際に、一人の聖術師が塔の中から高く投げ出され、外で待機していた

魔族に連れ去られようとしたらしい。それは、第三騎士団隊長が阻止したらしが、その聖術師は高く投げ出された時点で死んでいたようだ。

やつらの狙いは聖術師へ移っているから、気をつけるよいこと言われ、話は終わつた。

1週間かけてラナン塔へたどり着くことが出来たのだけれど、移動手段を馬車に変え、船に変え、荒い地を歩いたりで、歌う為の体力をつけるために運動はしていたが、それ以外の筋肉をつける努力はしていない聖術師の10人はヘトヘトとなつていた。

だけど、たどり着いたラナン塔の様子を見ると、疲れたからと言つて布団に転がつて休んでいい状態ではないことはすぐに分かつた。ラナン塔にいた10人の聖術師が死んでから、おそらく約2週間、それから呪いを跳ね除ける歌がないためだろう、空は昼間なのに暗く、紺と緑の斑に染まり、空気はどんどんよしていて、腐ったようなにおいが充满している。

私が今いる聖術師のグループのリーダーであるラーケスが、青ざめた顔をしながらも皆をまとめる。

「3班に別れ、昼の班はすぐに聖堂で聖歌を。夜の班はすぐに休憩。

朝の班は全員の荷物を整理してくれ。以上、皆頑張ろう。」

そう言うと、ラーケスはラナン塔の責任者に会いに行つた。

私は昼の班だったので騎士の人の案内で聖堂へ向かう。

聖堂へ向かう途中、騎士の団体とすれ違つた。

先頭にいたのは、銀髪と紫の瞳をした綺麗な男の人だつた。綺麗といつたが、それは歩き方とか雰囲気が綺麗であつて、女人のようだと言う事ではない。

むしろ、高い身長に切れ長の瞳、鍛え抜かれた体をもつていて、女性達を魅了するような容姿をしている。

上から下まで黒色で所々に銀の刺繡が入つている重々しい軍服を着て、肩甲骨くらいまでの長い銀髪はくくらずに背中に流している。すれ違う時、私達を案内していた騎士が、彼に声をかける。

「隊長。また出るのですか？少しば休んだらいかがですか。聖術師の人たちも到着したことですし。」

こちらを指差した男につられて、彼は私達の方へだるそうに視線を向ける。

「俺の勝手だ。」

私達への興味はまったく無いのだろう。視線はそのまま通り過ぎた。

聖堂には呪いの進行がひどい人たち、騎士も村人もたくさん集まつていた。

1回の歌では直らないだろうけど、呪いによる死人はまだ出でていなくてほつとした。

旅の疲れと、何とかしなければならないという必死さで時間の流れも分からぬまま、ただ歌うことに集中していると、時間はあつという間に過ぎ去り、夜の班へ交代する時間となつた。

夜の班にはトレーニアがいて、交代する時に、また一緒に部屋よ。そのままだと汗臭くなるから体は洗つてから寝てよね。なんて、冗談交じりに笑つて言われた。

洗い場で汗を流し、宛がわれた部屋に戻り、体力・気力回復のため、荷物の整理もせず、朝の班が整えてくれたのだろう布団にすぐにもぐりこみ、5秒と待たずに寝入つてしまつた。

今まで住んでいた都市は、夜になるとシンと静まりかえり、耳を澄ませば虫の鳴らす綺麗な音が時々聞こえてくるという穏やかな夜だつた。

でもランナントは夜だからといって、魔族の攻撃がやむわけも無く、戦いの生々しい音が聞こえる。

それでも、今日の私は疲れきつていて、遠くで聞こえる戦いの音に反応して起きれるような状態でもなかつたし、仲間の数名が怖くてこれから的事情が心配で眠れない人も居たようだけれど私はぐつすり寝入つていて、のどの渴きによつて、夜中にふと眼が覚めるまでは。

瓶に入った水を飲んでも、渴きが収まらず、無いと思うともつと欲しくなつた。

私が今いるのは塔の5階で、3階に食堂がある。

その食堂に水がめがあり、毎朝、騎士の人たちがためてくれると言つ話だつた。

このままだとしばらく眠れそうに無いとそうそうに決断した私は瓶を持ち、食堂を目標す。

食堂は300人ぐらい、いつせいに食事が出来るほど広く作られているため、夜中に一人でいるのは正直怖い。少し早足で水がめまで行くと、すぐに瓶へ移す。水を見ていると、このまま戻つて飲み足りなくて、また戻つてくる

のは嫌だなと思ひ。

ここで少し飲んでから、帰ることにした。

でも、怖いから、水がめの横に座り込んで、隠れるようにして水を飲む。

さて、戻ろうかと少し腰を上げると、食堂のドアが開く音がした。私はその人の姿は見えないし、相手からも私の姿は見えないはずだ。私のほうは何の音も立ててないはずなのに、入ってきた人はどうやら気配に気付いたようだ。

すごい。

「・・誰だ。」

低い声で、敵対心あらわに尋ねられると、ひやりとする。すぐに立ち上がり、怪しいものではないと主張した。

「わ、私はです！」

変な答えになつてしまつたが、何でもいいから何か言って、警戒をといてもらいたかった。

現に、相手を見ると短剣を抜いていた。

恐ろしい、抜く音なんてしなかつたのに。

「誰だ。」

眉根を寄せて睨みつけられたけど、剣は鞘に収めてくれた。助かつた。

「今日ここへ来た聖術師です。はい。水が飲みたかったので、ここにきました。」

瓶を右手に持ちあげ、左手は手のひらを相手に向け、完全無害ですよとアピールする。

男の人はふらふらとした足取りで、此方へ向かつてくる。

目の前まで来て、やはりと確信するが、昼間すれ違つた銀髪の人だ。この人も水を飲みに来たらしく、水がめの前にいる私を、無言で押しのけ、近くにあるコップを使って水を飲み始めた。

私に対する興味を失つたことを確信すると、出来るだけ物音を立てないよう、たるりそろりと扉へ足を進める。

扉に手をかけ、そういうえばあの銀髪の人、隊長つて言われてたなと思い出す。

と言う事は偉い人だ。偉い人には一言挨拶して退出すべきなのかと一瞬迷う。

だけど、恐怖が勝り。機嫌悪そうだし、言つても無視されそうだ、いや逆に迷惑になる、そudsうだと自分で納得して、扉を開けようと力をこめた時、後ろで机と椅子が音を立て、何かが倒れる音がする。

振り向くと、銀髪の人²が頭を抱えて、床に倒れこみ苦しんでいた。

私はすぐに駆けつけ、瓶を近くの床に置くと、銀髪の人の頭を抱え込む。

振り向いた時、遠目から見ても、この人の周りに緑色のもやが出来て、呪いの進行がひどいことが明らかだつたからだ。

顔色は真つ青になり、眉根をよせ、目も開けられないようだ。

銀髪を耳にかけ、此方へ向ける。呪いがひどい人に効くもつともいい方法は、直接聖歌を叩き込むことだ。

鼓膜を傷つけないように、囁くように、でも聖なる力はいっぱい込めて歌う。

途中に休み休み、床に置いた瓶から水を飲みつつ2時間ほど歌つただろうか

気付くと、銀髪の人は私の腰に腕を回し、眠つてしまつたようだ。彼は昼間とは違い、生成り色の簡易な服とこげ茶のズボンとブーツを履いていた。

その首元にはペンダントをしていて、手にとつて見てみると、ビックリ。やら呪いをよけるためのものだった。

昼間はそれで抑えられるだろうけど、夜は魔族の力が強まり、先ほどのように苦しむ日々だったはず。

昼間もこのペンダントがあるからと言つて、体と心の痛みから解放されるわけではなく軽減されるのみで、しかも、呪いは日に日に体と精神を蝕んでいく。

よく今日まで耐えたものだ。

このペンダントはもう使い物にならない。

呪い負けしてボロボロになつていた。先ほど壊れてしまつたのだろう。

床に置いた瓶から一口水を飲み、また歌い始める。

この頑張つている人の痛みが和らぐよう、銀の髪をなで、そう願いながら歌う。

朝日が昇る前に銀の髪の人は目覚めた。
頭をなでていた手をとられ、その手から私の顔までぐるぐるに視線が動き。
眼と眼があう。

そのとき、私は掴まれている左手が咎められているような思いに囚われ、なぜ頭までなでた自分！…と心の中で責めた。

銀髪の人は体を起こすと、私を痛いくらいギュッと抱きしめてきた。
圧死される！
口を開き懇願しようとすると。
低い声が耳元で聞こえた。

「名前は。」

殺す前に、相手の名前を聞くタイプですかそうですか。

「違うんです。とつさに。

「いえ、意味は無いんですよ。本当に、信じてください。

「ごめんなさい。」

そう私が混乱ぎみに言つと、銀髪の人は、少し体を離してくれた、手は私の体に回したままだつたが。

苦笑したような顔で、私の顔を覗き込んできた。

「お前、何言つてんの？」

名前だよ、お前の名前。俺の名前はアギ・ストレプト。一応、第三

隊長。」

そう言つと、彼、アギ隊長は立ち上がり。

首にある壊れたペンドントを見ると

「くそつ。役にたたねえ。」

そう言つて、そのペンドントを食堂の隅にあるゴミ箱に捨てた。扉のほうへ行くからそのまま出て行くのかと思つたら、扉の前で振り向き

「おこ、名前は。わつわと言えよ。」

少し眉根をよせ、低い声で言われたので、焦り氣味に答える。

「ルア・スター・チス。」

私の言葉をきくと、アギ隊長はいたずらっぽく笑い。

「またな、ルア。」

そう言つて、出て行つた。

部屋へ戻り、夜通し力を使つたせいか、交代のために起されたままでぐつすりだつた。

昼の班の仕事をきつちり終えて、夜の班と交代すると体を洗いに行く。

その帰り道に前田のようないふいふい、食堂へ寄り、瓶へ水をいいっぱいまで入れて
部屋へ戻る。

と、5階にある数ある中の1室の前に、アギ隊長が腕を組んで「王立ちしていた。

その部屋は私とトレーナーの部屋だ。

私が気付く前にアギ隊長は此方に気付いていたらしく、ニヤリと笑つていた。

そんなアギ隊長の前まで、私は気分が重くのろのろと進み、彼の前まで来ると頭を下げる。

「昨日は大変申し訳ありませんでした。」

昨日の頭をなでるという行為を後悔していたため、つぶつかり出した言葉だ。

「はあ？ 良くわかんねえけど。行くぞ。」

アギ隊長は私の言葉を深く探りつとせず、私の右腕をとつて、歩き始める。

あわてたのは私。

「え！ ？ ど、どこへ。」

「俺の部屋。」

「はー？」

私の疑問をこめた声を聞くと。

私の右腕を引き、顔を近づけ、そして睨みつけってきた。恐ろしい！

「お前が俺を救つたんだろー！ ちゃんと最後まで責任取れ。ほら、いくぞ。」

引っ張られていつた先は1階にある隊長室。他の部屋は1部屋しかないけど、

隊長室は2部屋あり。ひとつは会議と仕事部屋で、奥にあるもう一つの部屋が私室となつていた。

普通より少し大きなベットに言われるままにちょこんと座ると座った私の膝を枕にして、アギ隊長が横になる。

ふと我に帰ると、この体制はすごく恥ずかしいのではないか。うーんとうなつて考え方をしてみると、下から見上げられ、歌は。

といわれたので

羞恥心はいつたん脇において、これは治療これは治療、と自分に言い聞かせた。

今日も日が昇る前に隊長は日を覚まし、私がいるといつのに服を着替え

戦いに出る支度を整えている。

じつと見ていた私の目線に気付いた隊長は、ふつと笑い。

「そのベットで寝る。」

と命令してきた。

え、と呆然としてその言葉の意味を処理している間に、アギ隊長は部屋から出て行つた。

そんなことを言われてもそのままベットを使うわけにも行かず、私は自室へ戻りすぐに眠つた。

そしてそれからなぜか、私は毎晩アギ隊長の部屋で膝枕をしながら歌を歌うこととなつた。

まあ、重度の呪いを受けている状態だから、治療するのは別にかまわないけど

それなら朝も昼間も大人しくして、治療を受けて下さいといつたら戦いは止められないとのこと。

一度、塔の窓から、遠くでこの人が戦っている姿を見たけれど一番に敵の真ん中に突っ込んでいくのを見ると、正気を疑つた。みんなのために戦ってくれていると思っていたけど、この人はただ単に戦闘狂いなのかもしれない。

一番最初にあつた時、歩く姿や雰囲気が綺麗だと思つたけれど、戦う姿も綺麗で強い。

この人が怖がりもせず、一番に突撃して、なおかつ圧倒的な強さを

見せるから、他の騎士達も怖気づくことなく、敵に向かっていくことが出来るのだろうなと思う。

第3隊は個々の能力が高く、個人プレーで敵を倒していくのに対し、第4隊は3隊のサポートに周り、チームを組んで確実に敵を倒し、3隊の援護もこなすという、上手い戦闘隊形がとれていた。

でも、やっぱり皆が到着する前に敵のど真ん中に突っ込んでいくやり方は賛成できないし、見ていて怖い。

「せめて、周りの準備が整つてからにしてはどうですか？」

そういうと、私の膝を枕にして、横になつている人は

私の頬に手を伸ばし、数度なでてくる。

きっと顔が赤くなつてゐるはず、熱い。

そんな私を見て、彼は子供のよつに笑つた。

「考えとく。」

俺の名前はアギ・ストレプト。

戦つことが大好きで、いつでも一番に戦場に飛び込み他のやつらより成果を挙げることが快感でたまらなかつた。

そうやつて、戦いの日々を続けていたら、いつの間にか隊長にまでのし上がつていた。

皆をまとめるよう指示することや、新人の育成なんか面倒くさいと放棄していた俺だけ

隊の皆は色々文句を言いながらも付いてくれた。

生まれてから28年、隊長になつてから3年。

25年間は特に守るべきものは無く、自分中心で考えてきた。隊長になつてからも、それは変わることが無いと思っていたが俺にも人間らしいところがあつたようで、隊のやつらを死なせたくないなんて思えてきた。

隊のやつらが時々話す家族のことも、飲みに行く店のやつらのことも。

そんな思いに比例するかのように、戦場へ向かう頻度も、危ないギリギリの戦いも

さらに増えてきた。

皆が何を言おうが俺はそれでかまわなかつた。

だけどある日、魔族がとんでもないことをしてくれた。

人間の子供を装い、塔の内部に潜入して聖術師を皆殺しにしたのだ。

俺はそのとき、見回りから帰るといひで、塔の異変に気付き上を見上げると

聖術師の一人が窓から投げられているところだつた

その落下地点には魔族が12体ほど潜んでおり、聖術師を受け止めた後、逃げようとするところを

そうはさせまいと魔法を使い電撃を落とし、足止めをする。

聖術師は取り囲まれて、こちらからは姿が見えない。

電撃で一時体が麻痺している魔族を追い抜き、駆けながら抜いた剣を使い、奥にいた一番小さく細い魔族の胴体を切り落とす。

魔族の緑色の体液が体にかかるが気にせず、奇襲に狼狽している魔族達が立て直す前に2対目に目標を定め剣を振るう。

体液を浴びると呪われるという理由があるため、いつもはそこに注意して

切り方や切る場所を考えながら戦つのですが、今はそうは言つていられない。

体液の事は気にせず、聖術師を魔族にさらわれないよつて、ただそれだけを考えて戦う。

12体の内2体を瞬時に倒すと、方向を変え距離をとる。

追つてきた8体から距離をとりつつ、聖術師の姿を確認し、聖術師を抱えた魔族2体の様子を探る。

俺が急に攻めてきたことに慌てていいらしく、もたついていた。

ならば、立て直す前に一気にけりをつけてしまつと、追つてきた8体に電撃を落とし一瞬足を止めさせる。

その隙に間を駆け抜けようとするが、一度目のよつて全員に電撃が行き渡らず

電撃が上手く効かなかつた凶体のでかい2体にすれ違う瞬間、足を狙われたが

スピードはこちらの方が上だつたため難なくよけて、聖術師を抱えている2体へ襲い掛かる。

聖術師を捕らえていたやつ、腕と思われる部分を切り落とすと、すぐに聖術師を取り落とした。

聖術師の襟首を掴み塔の方へ引きずりながら剣と魔法で魔族を近づけないようにする、と

そこで応援が到着し、それから戦いは瞬く間に終わった。

結果は、魔族の群れを倒すことは出来たが、取り戻した聖術師は死んでいた。

さらに、呪いを大量に浴びてしまい、ただ歩くことさえも鈍い痛みが走るようになった。

夜はさらにひどく、頭と体を締め付けるような痛みが続く。薬を飲んで、ようやく眠れたかと思ったら、見るのは悪夢。呪いは体の痛みよりも精神攻撃のほうがきつい。

5日で精神も、体力もボロボロになつたが、聖術師がいない厳しい状況で

隊員の士気を落とすことは出来ない。

体の痛みより、精神を攻撃されるほうが辛く、この状態で一日でも休んでしまつと、暗い考えに落ちてしまいそうだった。

同じ隊長である、第4隊軍団長、デュランタには気付かれたが、俺の思いを汲み取ってくれて

ただ、無理はするなど呪いをはじくペンドントをくれた。デュランタもこんな状況で俺が呪いに倒れたと知れ渡り、士気が下がるのを懸念したのだろう。

それに、聖術師がいないのに休んでも呪いが軽くなるはずも無く、俺がやるといつたら貫き通す性格をしつっているからだ。

あの日から、約2週間、途中で隊員たちは戦い方や生活態度から、俺の体の状態に気付いていながらも気付かないふりをしてくれた。

聖術師がやつと塔に到着した日、俺の精神はずたずただつた。

いつそのこと戦場で果てて死ぬか、このまま数日後に死んでしまう

ほうが

樂ではないのかと思つほじ。

昼に隊員たちと見回りの打ち合せをしていると、第4隊長であるデュランタが

ラークスという聖術師をつれて来た。どうやらすぐに治療をしてもらえたと言つ事らしい。

戦いをして、この塔を守るのが役目なのに、自分の体を守るためにその役目を放棄する気にならず

自分は後に回して、他のやつの治療を優先しろとか、なんだかんだ理由をつけて、見回りへ向かった。

正直、治療されるのが怖かつたというのが大きい。

治療を受けて、回復したら、この苦痛を再度味わうことになる恐怖から、足がすくみ戦場へ出ることが嫌になるのではないか。

一度と戦いに出られなくなってしまう体になるのではないか、今までのよう一番に突っ込んでいく気力がなくなってしまうのではないか、そう思つてしまつ。

そんな腑抜けになるぐらにならいつそ、このままの状態で死なせてほしい。

この世界は好きだ、仲間も町のやつらも嫌いじゃない、やりたいことも結構やつてきた。

思い残すこと・執着することなんて何もない。

なら、このまま、やつらを守しながら死ぬのも悪くない、そう思つ。

夜になり、見回りを交代する時間となる。

最近は、夜はふらつくのを隠せないとこ今まで来ていたため、朝と昼のみ見回りに参加している。

椅子に座る仕事を夜にあてていた。

書類作りも終わり、頭痛がひどくなってきたため、嫌な思いを少しでもすつきりさせようと水がめのところに向かう。

そこには、一人の女がいた。

倒れるまでのことはあまり覚えていないが、意識が戻つてからはつきりと思い出せる。

きっと一生忘れることはないだろう。優しいぬくもりと、髪をなでられる気持ちよさ、その手をめぐつて行き着いた先は、きれいな青。

その青色を見ながら、そういうえば空なんて最近眺める余裕もないし、呪いによって汚くなつていたが

今はどんな色をしていただろうと、ぼんやり思つ。

体は少し軽くなつたし、気分も昨日より断然良い状態だ。

懸念していた、足がすくむなんてこともない。

昨日まで考えていた思いが馬鹿みたいだつた。

俺が、足をすくませ戦場へ出るのが嫌になる？

誰にも弱音を吐かずにすんでよかつた。

いい笑い話になるところだ。

でも、ひとつ嫌なことが増えてしまった。

あの女、ルア・スター・チスだ。

ルア自身が嫌なのではなく、ルアを求めてしまつ自分に腹が立つ。きっと、苦しみから回復した気持ちよさと、ぬくもりと手に執着してしまつたのだろう。

あれから、毎晩ルアに歌つてもうつっているが、執着心が治まる気配はない。

1日中でもこうして居たいほどだ。
任務中もルアがいるだらう場所をなんとなく見上げてしまつていていたりする。

隊員たちに言わせると、笑う頻度が増え、時々にやついていて、気味がわるこそうだ。

そして、聖なる力がこめられた歌を直に3ヶ月も聞いていると、重度の患者ではなくなつていて。

すると、ルアからある日の夜、こう切り出された。

「少し回復しているので、直接でなくて、えーと、そうですね。
6階の聖堂で毎日3時間ぐらい聞きにきて頂けるだけで、もう大丈夫ですよ。」

おめでとうござります。と、可愛い笑顔で言われたが、こちらとしては全然大丈夫ではない。

「行く必要がないだろ。ルアが毎晩来れば問題ない。」「問題あります！」

いつもでかい声は出さないルアが、少しほほを染めて、怒ったようにこちらを見ている。

が、全然怖くなく、むしろ可愛い。

「わ、私とアギ隊長の関係性を、なんというか、皆があ、あ、怪しんでいます。」

「関係性?他のやつらが怪しむのが、どう問題になる?」

少し顔を険しくすると、ルアの体が少しほね、視線をさまよわせる。

「こ、恋人ではないかと・・・」

ぼそぼそとつぶやく声でルアは言つた。

「じゃあ、恋人だといえばいい。」

ルアの膝から上半身を起き上がらせる。

体の調子も気分もいい。今までそういう状態ではなかつたが今なら

「やるか。」

服をぬぎつつ、ルアのほうを見ると。

真つ赤になつていた。

「やりません！」

ルアは素早く立ち上がり、そのままの勢いで早口にしゃべる。

「私たち聖術師はそういう事は神に結婚の報告をするまで、みだりに行わないのです！」

ですから、他の方々に関係があるかのじとく言われるのも嫌なのです！

今まで治療があるという理由でしたが、これ以上は仲間も納得してくれないでしょうし、私も納得できません！

だから、もうここへは来ません！」

そのまま出て行こうとするのを捕まえて、ベットに戻す。

「は、離してください。」

「言いたいことは分かつた。手は出さない。でも、今日の治療はここでやつてくれ。せつかく来たんだ。」

だろ？と顔を覗き込むと、真つ赤な顔で口をへの字にしつつ、渋々頷いてくれた。

次の日、俺はルアの部屋の前で腕を組んで待つていた。

その姿を見て、下から上がつてきたルアは目を丸くする。

「き、昨日、私が言つたこと聞いてました・・？」

「分かつてゐる。だから俺の方から來たんだろ。」

ルアは眉根をよせて疑問を浮かべていた。

「俺の部屋に来ないつて事は、俺がお前の部屋に行くしかないだろ。もちろん、手も出さない。我慢する。」

「ーですから。」

「で、もうひとつ問題だが。」

ルアの肩に手をおき、抱き寄せ。でかい声で叫ぶ。

「ルアとは恋人同士だが、手は出さないと誓つ！ 疑つやつは俺の所に来い！」

ルアは目を大きく開け、固まっていた。

「これで、問題は何もない。」

そういうて、ルアと一緒に部屋へ入つていった。

声を聞いたやつらが、噂を流したらしく

町に住んでいて、塔の内部の情報には疎いはずの第4隊軍団長、ユランタにまで数日後には知れ渡つていた。

「お前はまだまだ餓鬼だな。」

そう言って、ため息をついていたが、どう言われようとかまわない。

ルアを求めてしまう自分も受け入れていた。

数日は私の部屋で、なぜか以前と変わらずアギ隊長に歌を歌つていたが、トレニアから苦情を受け、またアギ隊長の部屋で歌を歌う日々となつた。

歌うと言つても、数時間歌い続けるわけではなく、1時間に数分ほど歌う軽いものだ。

最近はアギ隊長が眠るのを見ると、その後私も一緒に眠りてしまつたりする。

日が昇る前にアギ隊長は日を覚まし、支度を始めた。

その音で私も目が覚めたがあまり直視しないよう、視線を動かす。窓の外を見ると、東の空が緑色と紺色のまだら模様となつていた。

ここへ来た当初の空の色はひどく、昼間でも暗く紺と緑のまだら色をしていた空は、ここ最近は色が戻り。

晴れた日はきれいな青色をしていた。

太陽が昇る前だから、空が暗いのは分かるが、緑色はおかしい。もつとよく見ようと窓に近づくと、すぐ後ろからアギ隊長の声が聞こえた。

「何か見えるか？」

「これは振り向くと近すぎる距離になるな、と思い。どうぞまきしながら、そのままの状態で返事をする。

紺と緑のまだら色の空をした方角を指差す。

「空の色がおかしくないですか？」

私の指差したほうを、アギ隊長も確認したのだ。

「・・ああ。まあ、近いうちに何とかする。
どうやら、すでに知つていたようだ。」

「何とか？」

少し不安に思い振り向くと、やはりアギ隊長の顔が近くにきていた。
アギ隊長の大きな手が私の髪を数度なでる。

「何とかしてくる。」

朝の班と交代する前に、ラーケスを見つけ、何が起こるのかを問い合わせた。

嫌な予感がしたのだ、あの人気が無茶な行動を起こすのではないかと。
「魔族の軍隊が武装して一箇所に集まりつつあるそうだよ。
それを放つて置くと、大変なことになるじゃないか。
もつと集まつて、そのまま攻めてこられたら、被害は莫大なものになる。」

だから、第3隊が突っ込んでいつて、戦力を落としてじょじょに話だつたね。」

「突っ込む・・。」

「大丈夫、ここには第4隊が残るから、心配ないよ。」

肩をぽんと叩かれ、ラーケスは仕事に戻つたが、私はじばらくそこを動けなかつた。

その日の夜、いつものように歌を歌い、アギ隊長の寝顔を眺める。
一緒に寝る気にもなれず、ずっと起きて、髪をなでていた。
もうすぐ、目を覚ます時間が来てしまつ。
そうすると、彼は戦いに出て行くのだろう。
綺麗な銀髪をなでながら、整つた顔を見る。
怖いけど、目が離せない人。

今回の戦いも、この人なら嬉々として出て行くのだろう。

本当なら行かないでと言いたいけど、そういう事を言つてこられる状況ではないのはわかっている。

それなら、私ができることは。

「泣くな。」

アギ隊長はいつの間にか目を覚ましていて、私の目から落ちる涙を拭おうと手を伸ばしてきた。

その手を左手でつかみ、右手をつかつて彼を抱きしめた。

「呪われて帰つてきてもいいから、死なないで。

死ななければ、私があなたを救つから。絶対に救うから。」

必死になつていつたのに、胸に抱きこんだ彼は笑つた。

少しむつとして、体を離してにらむと。

「すげえ。お前、最高だな。」

そういつたかと思うと、体を起こし、顔をぐつと近づけてきた。

寸前でとめて、たずねて来る。

近い！

「キスなら、問題ないだろ？」

きっと私の顔はこれ以上無いぐらに真つ赤だろつ。返事を返すことも、うなづく事もできない。

瞬きを一つすると。

アギ隊長が、噛み付くようにキスをしてきた。

どのぐらい経つたか分からぬ、長いキスの後。

「やばい。」

と言つた。アギ隊長の言葉で終わつた。

深い息をついた後、アギ隊長は支度をするべく着替え始めた。

私が余韻でボーッとしている間に、アギ隊長の支度は終わつたらし
い。

私のおでこに一つキスをした後
「行つてくる。」
といい、出て行つた。

彼が帰つてくるまで、ほんの数日だつたが。

戻つてくるまで、そわそわして落ち着かなくて。トレーニアからは
「まるで、ネズミみたいね。」
とまで言われた。

第3隊が出発して5日後の晩。

当番であつたため、聖堂で歌つていると、人のざわめきが聞こえて
きた。

どうやら、第3隊が戻つてきたらしい。

嬉しくて、心配で、すぐに駆けていきたかつたけど、今は仕事中だ。
我慢我慢。

そう思つていると、聖堂の扉が開き、騎士たちが入つてきた。

どうやら、呪いを浄化するために被害にあつた人が連れてこられた
ようだ。

歌いながら、田当ての人物を探し出そつとするが、どこにもいない。
まさか・・と嫌な考へがよぎつた、その時。

扉から開き、また新たな患者が運び込まれた。

その中に銀色の髪をした人、アギ隊長がいた。

その肩には呪いを受けていると思われる騎士の一人を肩に担ぎ運ん
でいた。

どうやら、アギ隊長は怪我や呪いは受けていない様子だ。

よかつた。

本当によかつた。

アギ隊長はキヨロキヨロと周りを見渡し、私のところで視線をとめると。

ふわりと笑った。

私も涙目で笑い返す。

と、アギ隊長はこちらへすたすたと向かってきた。

まさか。と思ったが、やはりそのままの勢いをとめることがなく、私は抱きついてきた。

仲間はびっくりしていく、騎士の監さんははやし立て、とても恥ずかしかつたけれど

戻つてくれた嬉しさが勝り、私も抱きしめ返した。

・・その後、キスまでされたのは納得がいかないけれど。

それから数日間は治療におわれ、休む暇も無かつたが。

2週間も経てば、落ち着いてきた。

仕事が終わり、部屋へ戻つていると、途中でアギ隊長と出合つ。ちゅうどいい。そういうたたかは私に近づく。

「明日の午前中は一緒に町へ行こう。」

一枚の紙をこちらへ見せて

「休暇届を出してくる。」

私は昼の班なので、朝出かけても問題は無い。私がうなづくと。髪をぐしゃぐしゃとされる。

「今日は明日に備えて、ゆっくり休めよ。」

と、いうことは、今日はアギ隊長の部屋に行かなくてよいこと。ことだ、よね。

少し寂しく思いながら、部屋へ戻り、明日のことを考えながら眠りに落ちた。

いつもは紺色のアラインの太もももあるスカートに腰あたりを紐で縛っているだけのシンプルなものを着ているが朝起きて、いつものようにいつも紺色の服を着たときふと、これはデートなのではないかと気づいてしまった。そう思つてしまったら、着ていくものにも髪型にも色々気を使つてしまつ。

かばんをあさり、たんすを開け、髪を縛る紐を搜したが、一向に納得できるものが出でこない。

都市から出でてくるときに物をつめる時間は3時間、しかも限られたものしか持つてこれなかつたため

お洒落なものなど何もここにはないのだ。

しかも、自分がデートなどするとは思つていなかつたから、本当に何も無い。

半分泣きそうになりながらパニックに陥つていて、ドアを叩く音がした。

小さく返事をすると、アギ隊長が顔を出し。

散らかつた部屋を見渡すと

「大掃除でもしてたのか？」

と首をかしげた。

私が情けなくてベットに突つ伏して顔を隠すと
おなかに手を回し持ち上げられ、そのまま荷物のようつに肩へ担がれ
た。

「いくぞ。」

担がれながら、アギ隊長の姿を見ると、アギ隊長も普段着ているよ
うな姿だつたので

まあ、いいか。と思えた。

塔の1階まで降りると、ストンとおろして貰え、少しそつてしまつた服のしわを伸ばし整えてみると、右腕をとられ、そのまま歩き出

した。

町を見渡しながら歩いていたが、思っていたよりお店がたくさんあつた。

どうやら、ここから南にあるカッシア国と我が国であるレウイシア国との中継地点となつていて、荷物を運んでいる人の姿がよく見える。

周りを見ながら歩いていたため、アギ隊長が立ち止まつたことによらずかず、つないだ手を引っ張つて戻される。

そのまま、手をひっぱられ、周りに比べてお洒落な小さなお店へ入つていく。

チリンと小さな音が鳴ると、店の奥から背の低い丸めがねをかけたおじいさんが出てきた。

私たちが入ったお店はなんと「お店の店」で、中はひときわひ輝いていた。

「欲しい物があつたら、言えよ。じいさん青色の石つてない？」

「あるあるよ。」

陽気なおじいさんらしく、鼻歌を歌いながら奥に戻る。

もしかして、私の目の色と合わせて何かプレゼントしてくれるのだろうか。

悪いなと思いつながり、嬉しくなつてしまつ。

今度、私も何かプレゼントしてみよう。

「私、紫色が好きです。」

アギ隊長の瞳の色。

すると、アギ隊長はにやりと笑つ。

「青は俺の。お前は紫だな。じいさん紫色も頼む。」

色々な青い石を布の上に並べて戻ってきたおじいさんはその言葉を

聞くと

「はいはい～」

といつてまた奥へ戻つていつた。

お互いの瞳の色に一番近い色の口を選ぶと

おじいさんが、とりつけるのに一時間ほどかかるから少し待つてね～と言つて奥へ戻つていつた。

待つてゐる一時間は外にでて近くのお店へ入り。朝食を済ませている間に終わつた。

おじいさんが包んでくれた、小箱を受け取ると。また手をひっぱられ、どこかへと早足で向かつ。

行き着いた先は町の中央にある女神像の前。

向かい合つて、アギ隊長が小箱を開けたとき指輪が見えた。まさか、いや、え、まさか！

と心中であせつてゐると。

アギ隊長が、私の指に紫色の石がついた指輪をはめて言つた。

「結婚しよう。」

私の頭の中は真つ白だつた。

返事をしない私に、アギ隊長はほんのり頬を染め、少しそうねた顔をして。

「神様の前で結婚の報告をするもんなんだろ？」

私の顔も徐々に赤くなる。

「わ、私と・・？」

「他に誰が？」

顔を近づけてこられたので、ぎゅっと手を握る。

流れされちゃだめだ！ だって

「アギ隊長は・・・きっと、勘違いをされてゐるだけだと思ひます。

「

「はあ？」

目を瞑つているから分からないうが、きっと怖い顔をしているのだろう。

目を閉じててよかつた。

「あの時、私じゃない人があそこに通りかかっていたら…きっとアギ隊長は私なんか見向きもしなかつたと思います。」

言つて泣きそうになる。

今まで思つても、アギ隊長の傍にいることがいつの間にか好きになつていて。

彼が飽きるまでと思いつつ今まで過ごしてきた。

だって、私じゃなくてもあの状況なら誰でも助けるだらう。私が特別なことをしたわけじゃない。

だから。私にはアギ隊長に特別に好かれる要素なんて本当は何も無い。

目を見開き、アギ隊長の目を真正面から見る。

「勘違いしてはだめです！」

「お前が俺を救つたんだろ。」

目を開けたことを早々に後悔しました。

ものつ淒いにらまれてる。しかも真正面から真近で…怖い…！

「まさかお前も、勝手に救つておいて。直つたからつて手を離すのがやり方か？」

先日、食堂で同じ仲間の聖術師であるラークスが下品な話をしていたが、その話を今持ち出すのですか！？

しかも同類扱い！

「違います！」

「なら問題なんか何も無い。俺を救つたのはお前で、あの時からそばにいたのもお前。これからも傍にいるのはお前だ。だろ？」

そういうて、私を抱き寄せ、キスをしてきた。

軽いキスをして離れた彼は、もう一度尋ねてきたので。

泣きながら、首を縦に振った。

その後、少し泣いて落ち着いた私は彼の指に青色の石をはめた。
その青色の石をぽーと見つめていると。

アギ隊長が、私の左手を取り。

「もうそろそろ、交代の時間だろ？ 楽しみは今夜か。」「にやりと笑つてこちらを見てくる。

「まさか・・それ目的じゃないですね。この結婚。」

半田で疑つて見ると。同じような目をして見つめ返してきた。

「ラーケスは良いのに、お前は黙黙つてのはおかしいよな。」「ああ、そうだった。

独身者であるラーケスが大きい声で下品な話をしているとき、アギ隊長も参加していて

少し離れた位置でご飯を食べていた私に向かって冷ややかな目をしていた。

実は以前言つた、聖術師は結婚するまでみだりに行行為をしないといふ言葉。

あれは聖術師の理想の形であつて、規則ではないのだ。

それでも、私の意志を尊重してくれた、アギ隊長。
もう、何もいえません。

平和とはいえない世界で、お互に危ないことがいつ起るか分からぬ状況だけど
一緒にいられる幸せを楽しみましょうか。

最後まで読んでくれて、有難いござります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1849u/>

聖術師と銀の隊長

2011年9月17日20時04分発行